

[Radiology of the Small Bowel]

edited by Chen YMC, Zagorian RJ, Ott DJ, Gelfand DW

京都第一赤十字病院部長・第2内科

多 田 正 大

小腸の検査はX線、内視鏡検査を問わず煩わしいものである。長く、面積としても広い小腸をくまなく造影・観察することが難しいこと、苦勞のわりには上部消化管や大腸ほど病変が多くないこと、などが今日の小腸の形態診断学の進歩を妨げている。

このような時期に YMC Chen らが編集した“Radiology of the Small Bowel”が発行された。私自身、Dr. Chen とは直接面識はないが、彼はしばしば消化管 X 線診断学についてシャープな論文を報告しており、注目していた医師の1人である。改めて本書にしろされた彼の肩書を見て驚いたことに、彼は放射線科医であることを知った。なぜなら、彼の過去の論文を読んでみても、X 線診断のみにこだわることなく、患者の症候や病因なども考慮に入れて理論展開する姿勢が好ましく感じられ、彼ははっきり gastroenterologist であると思っていたのである。ともあれ、Chen とその仲間達がかくも立派な小腸 X 線診断学をまとめたことに対して、驚きと敬意の念を抱いている。

私の書棚を覗いてみても、小腸の X 線検査に関する書物として、Berk RN & Lasser EC: Radiology of the Ileocecal Area (1975), Marshak RH & Lindner AE: Radiology of the Small Intestine (1976), Sellink JL & Miller RE: Radiology of the Small Bowel (1982), Herlinger H & Maglinte DDT: Clinical Radiology of the Small Intestine (1989) などが既に刊行されている。いずれの書籍においても、提示されている X 線画像として、充満法を中心としたものであり、わが国のように二重造影によって微細な形態診断を行っているのとはいささか様相が異なる。本書でもその傾向は見られており、たとえば Crohn 病に関する記載では、数ミリ単位の微細病変の診断を目標とするわが国の消化器病医にとっては不満の残る内容であるかもしれない。

それにしても、この本に記載されている様々な小腸疾患の数、その画像診断の質には驚かされる。たとえば私達は celiac disease とか Whipple 病については、もっぱら欧米の症例を見て、その病像の一端を垣間

見るにすぎないのであるが、本書ではかなりのページをさいて詳述している。驚くべきことに、寄生虫や感染症、最近注目されている AIDS に関する記載もなされており、まさに最先端の X 線診断の書籍と言えよう。

それにしても、過去の成書と比べて本書では、バリウム造影のみならず CT や超音波診断も加え、今日的な斬新な内容になっている。更に臨床症状や背景因子を詳しく解析して、まさに小腸診断学体系がこの本の中に凝縮されている。これに内視鏡検査が加われば……と残念に思うが、やむを得ないところであろうか。要求すれば際限がないことであろうが、本書は放射線科医のみならず、広く消化器病学を志す研究者、臨床医にとって、最先端の良き指導書と言えよう。この本を一読して、とかく煩わしい小腸の診断学に対して、私達自身も啓発され、やる気を奮い立たされた。

●470 pp. 500 photos 12 line drawings
1992 ¥17,900

IGAKU-SHOIN Medical Publishers, Inc., New York (取り扱い医学書院洋書部 ☎03-3817-5670)